

《シンポジウム IV》

悪性腫瘍と核医学

司会のことば

福 地 稔 (兵庫医科大学核医学科)
利 波 紀 久 (金沢大学医学部核医学科)

核医学は、放射性医薬品と測定機器の進歩に支えられ、臓器や病巣の生理的、生化学的機能評価等でその特長を発揮し、特に最近では、代謝機能の評価や、受容体の画像化、さらに、それらの定量化へと、その進歩は目覚ましい。しかし、核医学の今日までの足跡を振り返るとき、どの時代にあっても、悪性腫瘍は、常に核医学の重要なターゲットとなって来た。これは、わが国における悪性腫瘍による死亡率が依然として高く、医学、医療全体の大きな課題と成っている事からみて当然だと言える。わが国における放射性医薬品の利用状況をみても、インビボにおいても、また、インビトロにおいても、悪性腫瘍の核医学的評価に関連のある放射性医薬品の利用が、極めて活発であることがこのことを裏付けている。本学会で、シンポジウム「悪性腫瘍と核医学」が取上げられたのも、これらの背景に負うものといえる。入江 實会長の指導のもと、実際の企画は、われわれが担当させて頂いたが、インビボ、インビトロ、治療と、全核医学的視点からの悪性腫瘍への対応の現状を総括し、今後の展開とその方向を探るべく配慮した。シンポジストは、インビボでは、越智先生に、 ^{67}Ga 、 ^{201}Tl 、など Non-antibody の分野を、

横山先生に、Antibody の分野を、窪田先生に、Metabolism (PET) の分野を、また、インビトロでは、辻野先生に、主に現状の総括を、また、遠藤先生に、DNA probe などこの分野の新しい動向を、成木先生には治療の現状の総括と今後の動向をおのおの担当して頂いた。いずれも、現在、第一線で活躍しておられる方々であり、全体を通して「悪性腫瘍と核医学」の現状を総括し、問題点と今後の方向が浮き彫りにされるものと期待している。特に、われわれが留意した点は、おのおのがテーマ別の縦割の話として終わってしまうことがないようにという点であった。そのために、インビボでは Antibody の分野も専門とされる越智先生に Non-antibody の分野を、Non-antibody の分野も専門とされる横山先生に Antibody の分野を、また、インビボの Antibody の分野も専門とされる遠藤先生にインビトロの分野を、インビトロも専門とされる成木先生に治療を、というように、全体の討論が活発に行えるような人選とした。多数の会員のご参加を得て、各シンポジストの協力のもと、有意義なシンポジウムとなることを期待したい。